

第2回 軍縮・不拡散に関する懸賞論文 審査委員会講評及び受賞論文要旨

財団法人 日本国際問題研究所
軍縮・不拡散促進センター
2010.6.28

1. 審査委員会講評

(財)日本国際問題研究所軍縮・不拡散促進センターでは、軍縮・不拡散分野の将来を担う若手研究者、実務家の育成に貢献するため、昨年より「軍縮・不拡散に関する懸賞論文」を企画・実施している。第2回となる今回は、軍縮・不拡散問題に関心を持つ大学生、大学院生、研究者及び実務家を対象に、①『核兵器のない世界』構想と日本の安全保障、②「原子力の平和利用と核不拡散」、③「紛争後の平和構築と実効性ある通常兵器の規制」からテーマを選択する方式で「説得力ある」政策提言を募った。

幸いにして大学生、大学院生を中心に多数の応募があり、応募数は昨年に比べてかなり増加した。審査は慎重を期して実施し、まず軍縮センターにおいて応募論文の中から審査対象とする論文を8件に絞った。そして、各審査委員が、これら8件の論文を5段階で評価したうえで、最終審査会を実施した。

最終審査では、全体として、依然として「これがずばり最優秀賞」と言えるまでには今一步のレベルにあるとの認識が共有され、8件の中から、いずれの審査委員の評価も相対的に高かった田中氏の論文1件を表彰の対象とすることで意見が一致した。

田中論文は、これまで日本の「核の傘」への依存と核軍縮外交の間の矛盾は否定的なものとして位置づけられてきたとし、このことを踏まえるならば、「核兵器のない世界」構想は、日本に安全保障の手段を再検討するという試練と、バランスとしての役割を担う機会とを提供するものであると捉え直している。その上で同論文は、①米国の通常兵力、自衛隊の戦力のみならず、核軍縮・不拡散政策を包摂した抑止戦略の構築、②「核兵器のない世界」構想に付随するリスクをどこまで引き受けるのか、という問題に関する国民的合意の形成、の2つを提言している。同論文は、冒頭の指摘のうち、「バランスとしての役割を担う機会」という側面には具体的な検討を加えていない点で論理の展開に偏りがあるものの、日本は「核兵器のない世界」構想を契機として、核兵器の役割低減を視野に安全保障の手段を再検討するべきだとの主張は一貫していた。ただ、誤字・脱字が散見されたことは残念であった。欲を言えば、筆者自ら提示した2つの提言が、相互にいかにつくのかにも分析が及んでいれば、より包括的な政策提言となったであろう。

今回、前年に引き続き最優秀賞該当論文なしとなったことは残念であるものの、審査委員は、表彰の対象とした田中論文については、執筆者の今後の活躍を期待させる内容であり、前回の優秀賞受賞論文よりレベルが向上しているとの考えで一致した。

2. 受賞論文要旨

『核兵器のない世界』構想と日本の安全保障：
日本にとってのチャンスと試練にどう対処すべきか

ニューヨーク大学大学院政治学研究科

田中 慎吾

本論文は、オバマ大統領が発表した「核兵器のない世界」構想が、日本にとって大きなチャンスであると同時に試練を課すことを示したものである。日本は過去に幾度となく核軍縮を呼びかけてきたが、非核兵器国であるがために、その影響力には限度があった。しかしオバマ構想の実現には、「核の傘」に依存してきた日本の協力が必要不可欠である。このことは、従来否定的に捉えられてきた「核の傘」への依存と核軍縮の推進を同時に行なってきた日本こそが、オバマ構想の交渉過程においてバランスラーとしての役割を担えるチャンスが存在することを指摘した。他方、今後どのように日本の安全保障を確保していくのかという大きな試練が課せられていることも併せて指摘した。そこで本論文は、今後の日本の方向性として、核軍縮・不拡散外交をも利用した日本独自の抑止戦略を構築して「核の傘」への依存を低下させるとともに、様々なリスクを引き受けてまで核兵器廃絶を国家目標として追求すべきかどうかについて、再度国内で広く議論を行うべきだとの 2 点を提言した。